

平成29年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表

総括表「評価」及び「総合評価の評定」の基準 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題	
本年度の重点目標② 地域農業への寄与 農業体験学習、模擬会社の運営、6次産業化への取り組みなどを通じて、社会との連携を深め、総合的な指導体制のもと、幅広い経営能力を養成するとともに、地域農業等に寄与する。		総合評価 A	(所見) 生産技術コースでは、「栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成」を課題とし、年間を通して多種多様な野菜・花き・果樹等を扱うことにより、学生の栽培管理における知識・技術の習得を支援した。学生プロジェクト15課題のうち15課題において、地域農業の諸課題を検証・改善し、15人中9名の学生が就農、3名が関連団体に就職する。 地域資源活用コースでは、「多様な地域資源を活用できる人材の育成」に取り組み、「阿波すず香」「阿波番茶」等、本県の特徴ある地域資源を用い加工品作りや販売について実践を通して学んだ。プロジェクト学習で消費地へ向かい、販売者・消費者へ聞き取り調査を実施するなど、消費地の意見をダイレクトにフィードバックさせ、次のステージへ繋げる活動ができた。 アグリビジネスコースでは、6次産業等「より魅力ある農業」の創造による地域貢献を目指し、その担い手となる「経営感覚に優れた人材育成」に向け、6次産業化を視野に入れた取り組みを促すよう指導を行った。この結果、6次産業化を視野に入れた取り組みに関する肯定的評価は、昨年度57.1%から本年度72.7%と向上するとともに、6次産業等「より魅力ある農業」の実践を目指し11名中2名が就農し、農業法人へは、4名が就職した。 カキのドライフルーツ、パッションフルーツのブレンドジャム、スダチマドレーヌ、サツマイモドーナツなど商品開発を行った。高校との連携ができたものや、消費者アンケートを取りながら販売を行い改良を重ねたものなど、商品開発だけでなくとどまらず、次の活動へと広げることができた。 学校からの情報発信に関しては、「学校HP」、「そらそうじゃHP」、「そらそうじゃFacebook」、「Go!Go!農大」などにより継続的な情報発信に努めている。 以上の観点から、「地域農業への寄与」に係る総合評価をA(十分達成できた)とした。					
①	栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成 (生産技術コース)	1 栽培・飼養管理について役割分担し、毎日栽培・飼養管理を実践させ、年間を通じた体系的・実践的な農業の知識並びに技術を習得させる。また、先進的な栽培方法について知見を深める。	学生の栽培・飼養に関する知識及び技術を習得して、それぞれがこれまでの経験に基づく農業の課題解決に努め、生産技術の向上につながるプロジェクト課題を80%以上、設定する。	栽培・飼養管理について、プロジェクト課題の設定と研究部門との連携により、年間を通じて実践した。そのことにより、農業技術を習得することに努めた。	A	A	農大では、種を1個ずつ播いているが、農家では機械を使う。農業は省力化が進んでおり、現状にあった指導を行ってほしい。 新「農業生産技術コース」になっても、6次産業で儲けたい学生に、6次産業の基礎知識を学ぶ機会があればいい。	プロジェクト課題の設定に当たり、研究部門や生産者との連携により、より実践的な課題設定を行う。 また、年間を通じて、栽培出荷できる品目の栽培管理を行うことにより、農業技術習得に努める。
		2 「農大祭」や「きのべ市」で販売する野菜や加工品、花苗等の栽培方法、機能性や調理方法等について学習する時間を設け、十分な知識を習得させる。	学生の自己評価だけでなく、消費者に対し、学生の農作物に対する栽培・貯蔵・流通・販売等に関する知識や経験を深めるために、生産現場の視察研修や実践を授業時間を利用して実施し、理解度を80%以上とする。	「農大祭」や「きのべ市」で販売する果実、野菜、花きや加工品等の栽培方法や生産現場の視察研修について授業時間を活用して実施し、知識の習得を図った。	B		「農大祭」や「きのべ市」で販売するための農産物・加工品生産を行うために、研究部門や他コースとの連携により、周年生産・販売と加工品生産に取り組む。	
		3 地域や消費者の需用・用途に応じた「生産・販売計画」を作成させ、地域の特徴を活かした作目の課題解決のための高度・専門的な栽培・飼養技術を実証するとともに、経営面から考察させる。	地域に貢献できるような課題解決プロジェクトを1課題以上選抜し、その成果を地域に発信する。	地域に貢献できるような課題解決プロジェクトについて平成29年度農大ホームページに3課題、平成29年度センターニュースに2課題発信した。また、アグリビジネススクールや農協からの技術指導の要請に応えた。	A		野菜では家業を基本としたプロジェクト課題が多いため、貯蔵についての課題化に加えて、1年次生の栽培品目について注意して選定する必要がある。	
②	多様な地域資源を活用できる人材の育成 (地域資源活用コース)	1 地域資源を活用した先進事例や地元での地域資源に関する情報提供を積極的に行い、プロジェクト活動への取り組みに活かす。	教員から情報提供を行うと共に学生の発表機会を年間4回以上持つ。	コース実習・演習の時間を活用し、自らがほ場で生産している作物やこれから生産しようとする作物、加工、市場流通等の知識について情報提供に努めた。 本年度は、阿波すず香、阿波番茶、タラノメ、とうがらし、タケノコ等を教材として取り上げ、商品開発、販売方法の検討等について試みた。	A	A	阿波晩茶、とうがらしを毎年、生産・加工・販売しており、消費者からも好評を得ている。このように、毎年販売できる定番商品作りに取り組む。	
		2 地域資源を活用した加工・販売の先進産地や市場の視察研修を実施し、最前線の情報をダイレクトにプロジェクト活動に活かす。	先進地での校外研修を年間2回以上実施し、学生の自己評価において、当該活用技術の理解度を80%以上に上げる。	本年度は、「徳島農大そらそうじゃ」が出荷している量販店「阪急オアシス」、大阪駅前にある他の道府県のアンテナショップ、デパートの青果売り場の視察など流通販売の実際と新規事業分野の最前線を体感する視察・研修を行った。都市部の青果流通の実態や新ジャンルの現場にふれることで、研修内容をプロジェクト学習に活かした。 地域資源の活用技術の習得に対する学生の肯定的評価は、2年次生が92%、1年次生が100%であった。	A		次年度も市場や大手量販店での流通販売に関する研修や産地視察研修を実施し、最前線の最新情報をダイレクトにプロジェクト活動に活かせるよう取り組む。	
		3 香酸柑橘「スダチ」、「阿波すず香」の加工品の商品化に向けた検討を行う。「ジャム」、「ビール」、「阿波すず香胡椒」等について検討を重ね、品質を高める。唐辛子を用いた加工品の検討と試作を行う。	香酸柑橘の加工品、2品目以上の品質改善または商品開発を行う。唐辛子を用いた加工品1品目以上の商品開発を行う。	香酸柑橘の加工品開発は、アグリビジネスコースの学生プロジェクトで「スダチ」に取り組んだため、「阿波すず香」を中心に実施した。「阿波すず香」は、阿波すず香胡椒を本校産青唐辛子を原料に原料配合が異なる数種を試作し、「あるでよ徳島(徳島市)」で試食・アンケート調査を実施した。観光客を中心に味、考え得る使用法等を聞き取り、味は良好な評価を受け、使用方法については次期開発のヒントとなるような意見を得ることができた。昨年度問題とした保存性も改善できた。 また、阿波すず香ビールを作成し、商品として「あるでよ徳島」で150円で18個をすべて販売することができた。食感の均一化等に改良の余地があり、今後品質向上に向け、学生プロジェクトで検討していく。 唐辛子の加工では、民芸品調にひもで結わえたものを開発し、農大祭・きのべ市等で販売した。	A		新しい機能の資材をプロジェクトで取り入れて試してほしい。資材取扱業者の情報は有効である。 J A 発刊の日本農業新聞に、「1村1品運動コーナー」があり、各地域の6次産業で新しく作った商品を出品しており、農大も参加して頂きたい。	学生プロジェクトで阿波すず香の加工品開発を実施し、品質の向上を図る。「阿波すず香胡椒」ではトウガラシの種類を変えた試験を実施する。「阿波すず香ビール」は食感の均一化を課題として、試験を行う。

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
③ 地域農業の振興につながるビジネススキルを身に付けた人材の育成 (アグリビジネスコース)	1 学外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や社会のニーズを把握、分析させ、商品開発や販売戦略等に活かす。	市場ニーズの把握に取り組んだ学生プロジェクトを50%以上とする。	コース所属の2年次生の63.6%が、消費者ニーズの把握に努め、卒論研究に活かしたと回答した。	A	B	徳商、城西など交流も盛んになるなか、学生がアイデアを提案し、商品化を行う際、他校のデザイン科の学生ともコラボをすれば更に良いものができるのではないかと。 高付加価値とは、商品の持つ情報量が増えることだと考えられる。「安2GAP」取得とか、「農大生」が育てたなどの情報を付加するものもい。	各自のプロジェクトテーマに関連する品目について、市況や販売形態等の把握を目的とした量販店や産直市等の視察や消費者ニーズを目的としたアンケート調査等を行うよう指導する。
	2 コース実習、卒業論文等の課題解決の過程に「プロジェクトマネジメント」、「ブレインストーミング」等の各種の手法を習得させる。	1つ以上の課題解決のための手法を利用できるようになった学生を80%以上とする。	コース所属の2年次生の63.6%、1年次生の73.3%が1つ以上の手法を習得できたと回答した。	B			本年度、農大定番の商品開発に実施したブレインストーミングを継続するとともに、プロジェクト活動の日程表作成、進捗管理を中心としたプロジェクトマネジメントの指導を強化する。
	3 学生のプロジェクトにおいて、「6次産業化」を視野に入れた新たな農業ビジネスモデルを研究・実践し、成果を卒業論文に盛り込む。	「6次産業化」を視野に入れたプロジェクト研究に取り組んだ学生を50%以上とする。	コース所属の2年次生の72.7%が6次産業化を視野に入れた取組みをしたと回答したが、加工品開発等の6次産業化をテーマに卒業研究を実施した者は、27.2%(11名中3名)であった。 また、コース所属の1年次の80%が6次産業化を視野に入れた取組みを計画していると回答しているが、現在のところ加工品開発等の6次産業化をテーマ卒業研究を計画している者は53.3%(15名中8名)である。	B			6次産業化研究施設を活用した、農大定番商品の創出等に向けた取組を推進する。
課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	学校関係者の意見	次年度への課題
④ 地域農業への寄与のための体制づくりと、研究成果や学生活動に係る積極的な情報発信	1 平成24年度より導入した加工関連講座を充実させ、商品開発に取り組み、地域社会へ発信する。	コースや模擬会社において、加工品を2品以上試作し、地域に発信する。	食品乾燥機を利用し、カキのドライフルーツを試作した。約1日で高温急乾燥させることで、カキの黒変が押された。JA阿波みよしから講習依頼。JA阿波みよしでは次年度から本格的にカキのドライフルーツを生産・販売する見込み。 県内ジャム工場の協力でパッションフルーツのブレンドジャムを試作、今後も原料供給が期待できるとともに、パッションフルーツの生産とその利用で新野高との連携ができた。 学生プロジェクトで焼菓子を2品以上試作・販売した。	A	A	第一次産業が、お菓子など消費者へ販売するものを作成するのでもいいが、甘藷のペーストなど第二次産業へつなぐ加工もよい。第一次産業と第二次産業のよさが生かされる。 クロロビクリンを打つ時期をずらすなどの実験を農家はできない。学生の研究結果を情報公開して地域貢献していただきたい。現在、ホームページに掲載していることだが、ローカルTV等でも流してほしい。	次年度からJA阿波みよしのカキのドライフルーツ生産が本格的に動き出す。今後も生産団体へのフォローアップを図り、地域貢献に資する。 試作を依頼したジャム工房からパッションフルーツ原料の供給依頼があり、農大、卒業生、新野高及び生産者の地域連携が仕組みそうである。 今後は、試作品を定番品までレベルアップする必要がある。
	2 学生の研究や学校生活、「そらそうじゃ」の活動状況等定期的な広報等を作成する。 また、農大ホームページその他の情報発信ツールを活用して農業関係機関、関連企業、高等学校だけでなく、一般社会に対しても積極的に情報発信を行う。	教育活動に関する広報紙を年間12回以上作成して公開する。 ホームページを2週間程度で更新し、最新の情報を地域社会に発信する。	広報「Go!Go!農大2017」を毎月1回または2回発行し、大学校内に掲示するほか、農大のホームページに掲載している。 「そらそうじゃ」の活動を、タブレット端末を使用し、SNS(フェイスブック)に掲載している。出張販売において、タブレット端末を持参し、オンタイムに販売状況をSNSで発信した。 ホームページは、定期的な更新の形ではなく、新たな情報をその都度掲載しており、平均すると月2回よりは多くなっている。 昨年度より新たに、メールマガジン「アシスト農大」を開始し、ホームページにて、サポーターの登録者を募集し、情報発信を行っている。	A			農大のホームページやSNSを閲覧しているのは、学校関係者が多い。より多くの一般消費者が、農大のホームページやSNSを検索し閲覧するような働きかけや仕組み作りを考えていかなければならない。
	3 本校の教育活動に関して積極的な情報発信・広報活動を行い、未来の徳島県農業を担う意欲と活力に満ちた新入学生を確保する。	高校訪問を年間2回以上行い、高校でのガイダンスにも積極的に参加する。 また、義務教育や高等学校の依頼があれば、キャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力する。	高校訪問を年間2回行い、高校でのガイダンスにも積極的に参加した(年間22回)。 また、学校農業クラブリーダー研修会及び那賀高校、嶋島第一中のキャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力した。	A			高校ガイダンスについては、体験型模擬授業への工夫と配慮が必要である。農大ならではの体験授業の工夫が必要である。